

フロンティアスクール中間報告書

| | |
|-------|-----|
| 都道府県名 | 新潟県 |
|-------|-----|

学校の概要（平成15年4月現在）

| | | | | | | | | | |
|-----|-----------|----|----|----|----|----|------|-----|-----|
| 学校名 | 頸城村立大養小学校 | | | | | | | | |
| 学 年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 2 | 2 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | 11 | 16 |
| 児童数 | 39 | 37 | 32 | 44 | 30 | 42 | 1 | 225 | |

研究の概要

1. 研究主題

基礎・基本の習得と生きる力の育成

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- ・ 3年生・国語・算数
昨年度までの2クラス編成が1クラス編成になったことからできる限り複数の教員で指導していくことに重点を置いたためと、中学年の基礎・基本を確実に習得させるため。
- ・ 4年生・国語・算数
高学年になるにつれて個人差が出てくるという実態を踏まえ、中学年で学習の積み重ねを重視して国語と算数の基礎・基本を確実に習得させるため。
- ・ 5・6年生・算数
児童の実態から見て個人差がある教科であることと、今後個人差に対応した指導を工夫していく必要があるため。

(2) 年次ごとの計画

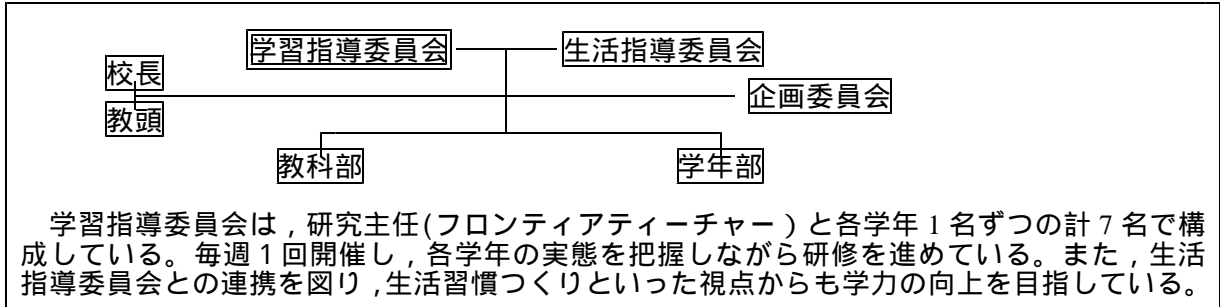
| | |
|--------|--|
| 平成14年度 | |
|--------|--|

| | |
|--------|--|
| 平成15年度 | <p>テーマ 基礎・基本の習得と生きる力の育成</p> <p>研究の見通し 3年生以上の算数においては、昨年度の標準学力検査や新潟県小学校教育研究会・学習指導改善調査の結果や児童の実態を基にして、学習内容に応じて習熟度別編成や等質集団編成、TT、さらにマスタリー学習を行って個人差に応じた指導を試みる。</p> <p>3・4年の国語では、学力の実態や学習する内容に応じて、TT、興味・関心や課題別編成で個人差に応じた指導を試みる。</p> <p>研究の内容・方法</p> <p>(1) 指導と評価の一体化に向けて 重点単元を明確にした年間指導計画の作成と実施 昨年度の標準学力検査や学習指導改善調査等の結果、学年引継ぎ事項などに基づいて、学年ごとに国語と算数の重点単元を設定し、指導計画に明示する。また、毎週1時間設定している「はつらつタイム」で個に応じた補足的な学習や発展的な学習を効果的に行う。</p> <p>学習評価システムの構築 単元の学習に入る前に評価規準や評価に関する重み付けを確認する。また、プレテストや形成的評価を実施し、個に応じた教材の開発を行ったり、学習形態を工夫したりする。</p> <p>研究連携校との情報交換 頸城地区教育研究会を中心に、互いに授業参観を行ったり、授業後の協議会を行ったりし、児童生徒の実態を踏まえて指導力の向上に努める。</p> |
|--------|--|

| | | | | | | |
|------|---|----|----|----|----|----|
| | (2) 効果的な少人数指導の在り方について 3年生以上に、効果的な少人数指導ができるように教員を配置する。 また、児童の学力の実態や単元の内容により、柔軟な指導体制をつくる。 | | | | | |
| | | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | |
| | 国語 | 算数 | 国語 | 算数 | 算数 | 算数 |
| 教頭 | | | | | | |
| 教務主任 | | | | | | |
| 研究主任 | | | | | | |
| | (3) 教師の資質向上を目指した職員研修 指導力向上のための研修 評価方法とその活用にかかわる研修 | | | | | |

| | |
|----------------|--|
| 平成 16 年度 | テーマ 基礎・基本の習得と生きる力の育成 (さらに焦点付けるために、副題を設定する予定) |
| | 研究の見通し 3年生以上の算数，3・4年生の国語において，個に応じた指導の充実を図っていく。 また，児童の学ぶ意欲や知的好奇心を喚起するための方策を考え，確実に基礎・基本の習得を図ることができるようにする。 さらに，既習事項や他教科，総合的な学習の時間などに関連付けながら学ぶ場を構想する。 |
| | 研究の内容・方法 |
| | (1) 指導と評価の一体化の具現 学習評価システムの改善 児童の学ぶ意欲の高揚と自己評価力の育成 効果的な少人数指導の実践 教師の指導力の向上及び教材研究 |
| | (2) 保護者・研究連携校との連携強化 保護者との情報交換 研究連携校との情報交換 |

(3) 研究推進体制



平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

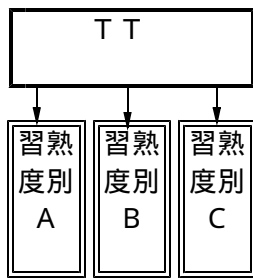
| | | |
|---|------|------|
| (1) 指導と評価の一体化，効果的な少人数指導の在り方について 以下の点において成果が見られた。 学級担任と級外職員の打合せによる教材研究の充実 児童の学習に対する関心の高まりと学力の向上 発展的な学習や補充的な学習等個に応じた指導の充実 | | |
| 数値は平均値 評価の尺度 4：とても思う 3：まあまあ思う 2：すこし思う 1：ぜんぜん思わない 学校評価より(対象：職員) | | |
| 項目 | 1学期末 | 2学期末 |
| 学習状況を的確に把握し，必要に応じて個別指導等を行った。 | 2.5 | 2.8 |
| 少人数指導やTT指導は，効果的であった。 | 3.3 | 3.5 |

学校生活満足度チェックより(対象：全校児童)

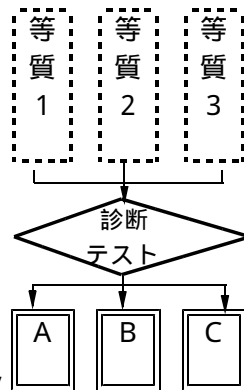
| 項目 | 5月末 | 7月末 | 10月末 | 12月末 |
|------------------------------------|---------|------|------|------|
| 学校の勉強は、よく分かりますか。また、楽しいですか。 | 3.3 | 3.2 | 3.3 | 3.3 |
| 少人数で学習したり、二人の先生で学習したりすると分かりやすいですか。 | 3.3 | 3.4 | 3.4 | 3.3 |
| 分からないことや疑問に思ったことを、進んで先生に聞きましたか。 | 2.9 | 2.8 | 2.9 | 3.0 |
| 家で、勉強や読書をどれくらいしていますか。 で囲みましょう。 | 10分 | 16.8 | 20.2 | 12.2 |
| | 20分 | 20.9 | 15.6 | 16.7 |
| | 30分 | 28.2 | 26.1 | 29.7 |
| | 40分 | 19.5 | 22.0 | 22.1 |
| | 60分 | 9.1 | 8.7 | 12.6 |
| | 90分 | 1.8 | 4.6 | 2.7 |
| | (%) その他 | 3.7 | 2.8 | 4.0 |

目的を明確にした発展的な学習や補充的な学習の実施
 国語においては、児童同士のかかわりや共に高め合うといった視点に立ち、一斉指導を行った方がよいと判断した場合はTT指導を実施し、一斉指導で学習したことをもとに複数のコースに分かれて発展学習ができる場面は少人数指導を試みた。
 「興味・関心や課題別編成で実施した単元」は、児童の興味や関心に応じたコース設定が可能な場合であり、単元の終末に発展学習として扱うことが多かった。
 「等質集団編成で実施した単元」は、音読やスピーチなど一人一人の学習活動の時間を確保する場合や、3年生の国語辞典の学習のように初めて学習する内容で確実に身に付けさせたい内容の場合であった。
 算数においては、児童の実態に応じて柔軟な指導体制をとってきた結果、以下に示すような指導形態が生まれた。(一部を紹介)

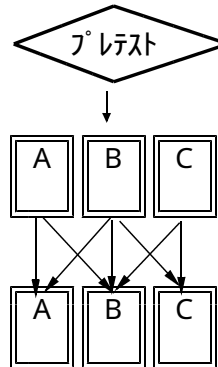
《モデル1》



《モデル2》



《モデル3》

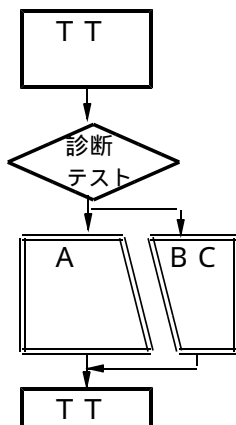


A ~ C,

1 ~ 3は学習集団を示す。

《モデル4》

完全習得(マスタリー)学習



「習熟度別編成で実施した単元」は、標準学力検査等の結果やプレテストの

結果に基づいて、既習事項の定着に差がある場合、単元の途中で診断テストを行った結果さらに習熟を図る必要がある児童がいた場合の単元であった。

「興味・関心や課題別編成で実施した単元」は、自分の苦手な学習内容を選択する場合の単元であった。自分の苦手な内容を克服しようとして、児童自らコースを選択した。

「等質集団編成で実施した単元」は、初めて学習する内容で児童の実態にあまり差がない場合、児童同士のかかわり合いを大切にしたい学習内容の場合

の単元であった。

- (2) 保護者との情報交換について
4月のPTA総会後の学校グランドデザインの説明に始まり、学年・学級懇談会や学年便りで学力向上フロンティア事業の取組について情報を共有してきた。
12月に行った中間発表会では、多数の保護者から少人数指導の授業参観、その後の懇談会への参加を得ることができた。学力向上に向けて学校として取り組むこと、家庭で取り組むことについての意見交換を行うことができた。

2. 今後の課題

- (1) 児童自身が学習の履歴を大切にしながら積み上げながら学んでいこうとするための支援や手だてを、さらに工夫していく必要がある。
(2) 児童の自己評価力をさらに育てる必要がある。
児童の学ぶ意欲や知的好奇心を喚起するための方策をさらに考え、確実に基礎・基本の習得を図ることができるようにする。さらに、既習事項や他教科、総合的な学習の時間などに関連付けながら学ぶ場を構想していく必要がある。
(3) 学習面や生活面において、保護者との連携をさらに強める必要がある。
当校における児童の「生きる力」を明確にし、保護者と同一歩調で児童の生活習慣づくり・学習習慣づくりに取り組んでいく必要がある。

学力等把握のための学校としての取組

- (1) 学校生活満足度チェック(児童による内部評価)
調査の目的
教育期ごと(期:4・5月, 期:6・7月, 期:9・10月, 期:11・12月, 期:1~3月)に、期のねらいに即した教育活動や諸行事、活動等を評価する。
実施内容
学習面や生活指導面を含め、学校生活全般について児童の意識を質問紙で調査する。
実施時期
各教育期の終わり
(2) 学校評価(教職員による内部評価)
調査の目的
グランドデザインや教育課程等について自己点検をし、学習指導委員会や生活指導委員会で問題点の要因と対応策を検討する。
実施内容
グランドデザインの検討と教育課程の編成について
実施時期
各学期末
(3) 家庭・地域による外部評価
調査の目的
PTAの諸活動や学年・学級懇談会での具体的な取組の説明に対する意見・要望を取りまとめ、その後の教育活動に生かす。
実施内容
保護者による教育アンケート、学校評議員との懇談
実施時期
教育アンケート 平成15年7月末、平成16年1月末の2回
学校評議員との懇談 平成16年2月23日
(4) 標準学力テストの実施
調査の目的
児童の学力実態を客観的に把握し、学力向上のための資料として生かす。
実施内容
教研式全国標準学力検査観点別到達度テスト(CRT)
実施時期
平成16年2月3・4日

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

(1) 中間発表会

日時 平成 15 年 12 月 10 日

場所 大湊小学校

対象 指導者 3 名 (上越教育事務所 2 名 , 柿崎町学習指導センター 1 名)

来賓 9 名 , 学校評議員 5 名

学校関係者 49 名 (研究連携校の 9 名を含む)

保護者 105 名

概要 これまでの取組をまとめた研究冊子や全学級公開により , 少人数指導の成果を
広めた。また , 保護者とともに , 確かな学力について情報交換し , 今後の学校の
取組と家庭の取組について確認し合った。

その他 ・ 中間発表会の概要についてホームページで公開している。

・ 頸城地区教育研究会での学力向上部会においては , 国語と算数を中心に学
力向上への取組を紹介したり協議したりした。また , 小中連携の立場から ,
頸城中学校と学習指導面についての情報交換を行った。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 6学級以下 7～12学級
 13～18学級 19～24学級
 25学級以上

【指導体制】 少人数指導 T・Tによる指導
 一部教科担任制 その他

【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無